



# 地域の価値

わたしたちの住む  
地域社会では、少子高齢  
化などの社会情勢の変化や住  
民一人ひとりの価値観の多様化  
などにより、住民同士のつなが  
りが希薄になってきています。  
地域の中で人と人とをつなぐ  
取り組みの大切さが見直  
されています。

## 変化する地域

少子高齢化により人口構造が大きく変化し、これまで地域の担い手の中心とされてきた世代が、地域から減少しています。夫婦共働き世帯の増加や核家族化の進行も、地域から担い手が減少している原因の一つです。また、地域に対する考え方や個人の価値観が多様化し、「できるだけ近所とかかわらない」という考えを持つ人も増えてきています。

こうした状況が続くと、地域で助け合い、支え合うというつながりが希薄になってしまいます。そして、防災や防犯、高齢者や子育て世代に対する支援、環境保全の取り組みなど、生活に結びつく場面で、さまざまな問題を引き起こします。

住民同士の連帯感が薄れると、地域を持つ、互いを助け合う力は、弱体化します。このことを危ぶむ声は少なくありません。地域の課題を解決するためには、住民同士が協力し、助け合うことが必要です。

この記事では、市内の至るところで行われている、人と人をつなぎ、力を集め、互いに支え合う地域づくりのための取り組みについて紹介します。

## 話すことから広がる輪

この夏、地域の小学生が呼びかけ人となり、自治会連合会第八支会岸町一・二・三丁目自治会(で、振り込め詐欺・交通事故撲滅運動が行われました。三人一組で、一軒一軒、高

齢者の家を訪問。地域の高齢者にチラシを配り、犯罪や交通事故に遭わないように呼びかけました。小学生は、高齢者に直接チラシを手渡しながら、被害に遭わないようにするための注意点などを説明して回ります。

訪問を受けた羽石ユキ子さん(89歳・岸町一丁目・上写真)は、「孫のような子どもたちから、気を付けて」と言われると印象に残ります。ふだんは小学生と話す機会も少ないので、こうした取り組みはうれしいですね」とっこり。

この運動は、防犯や交通安全を呼びかけて、被害を未然に防ごうとするだけではなく、地域内でのコミュニケーションションづくりも目的としています。自治会連合会会長で同支会会長の栗原博司さん(73歳・岸町一丁目)は、「地域づくりで大切なのは、地域の中の距離感を縮めること。近所同士や世代間の距離を縮め、信頼関係を築くことが地域づくりには何より大切です」と話してくれました。

また、この取り組みでは、一人暮らしの高齢者の安否確認ができるほか、子どもが活動を通じた経験を親や兄弟姉妹に話すことで、家庭内の防犯や交通安全に対する意識を高める効果も期待できるそうです。

参加者の平田結衣さん(仙波小6年)は、「初めて会う人を相手に話すときは緊張して、言葉がうまく出てきませんでした。でも、一生懸命に説明を聞いてくれて、いろいろな話をすることができました」と話してくれました。

「こうした活動をそれぞれの自治会が行い、地域の中で人と人をつなぎ、距離を縮める取り組みが広がるといいですね」と栗原さん。

地域の活動を通じて、近所の人と話すきっかけが生まれ、広がる輪があります。



チラシを配りながら説明する小学生。人と人をつなぐ取り組みは、自治会を中心に広がっています。



小学生の話に、熱心に耳を傾ける高齢者の皆さん。



訪問途中、自治会館で行なわれていた老人会の集いに飛び入り参加。



## 顔のわかる地域づくり

今年で八回目を迎えた南古谷地区の「子ども防災キャンプ」。災害時を想定して学校の体育館を避難所に見立て、子どもたちが宿泊体験をします。炊き出しや小さな子どもたちの世話など、このキャンプで重要な役割を果たすのは中学生。キャンプ活動を通じて、中学生には、いざというとき自分たちが地域で率先して行動するという意識が生まれます。

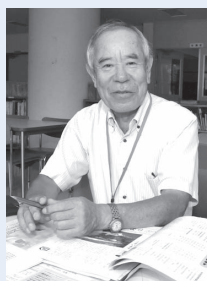
同キャンプ実行委員長の根岸正春さん(59歳・木野目)は、「災害はいつ起きるかわかりません。日中、多くの大人が勤めに出て地域にいないとき、中学生は中心となって活動してくれる頼りになる存在です」と期待しています。

災害時、近くの避難場所が使えない、という想定で会場を地区内の五つの小中学校で持ち回るのも特徴です。「自分が関係する学校以外に入る機会はめったにありません。そのため鍵の保管場所や防災倉庫の位置もわからない。いざというとき、それでは困るので、学校と協力しながら、あえて毎年場所を変えて実施しています」と自治会連合会副会長で南古谷支会長の櫻井晶夫さん(60歳・並木)。

災害時に、自力で避難することが困難な高齢者や障害者に対して、災害情報の提供や避難時の介助を行う災害時要援護者避難支援制度。地域の福祉向上のため、さまざまな取り組みを行う民生委員・児童委員は、この制度で、重要な役割を務めます。地域を見回り、いざというときに助けが必要と思われる方に、制度への登録を勧めています。

「それでも十分に把握することは難しいです」と、自身も霞ヶ関地区で三百を超える世帯を受け持つ市民生委員児童委員協議会連合会会長・久保田高一さん(73歳・笠幡)。

地域の状況を、より把握するために役立っているのが、地域包括支援センターが運営する圏域包括ケア会議です。久保田さんの地区では、「まるごとネット」と名づけられたそ



「近所同士のつなぐ心強い活動です」と話す久保田さん。

## 地域の輪 見守ります

の会議に、在宅介護支援センターやケアマネジャー、医療機関、介護サービス事業者などが、二か月に一度の割合で集ま

り、地域の高齢者を取り巻く課題などを話し合っています。

災害時は、消防などが駆け付けるまでに時間がかかることが考えられます。また、民生委員・児童委員だけでは、支援の手が行き渡りません。そのとき、助けになるのが地域の協力。「災害時に要援護者を『一人も見逃さない』ために、地域で助け合う体制作りが必要です」と久保田さんは話します。

災害時要援護者避難支援制度については、市防災危機管理課(☎224・5554)までお問い合わせください。



圏域包括ケア会議の様子



参加した関根靖浩さん(57歳・久下戸・写真左)は、「子どもたちにできるだけ声を掛けるようにしています。災害時、一度話したことがあるとわかるだけで、安心につながります」。



「だるまさんがころんだ」を楽しむ子どもたち。遊びのリーダーももちろん中学生。避難時には、小さい子どもたちを不安にさせない効果も期待できます。



キャンプの参加者200人分の夕食の準備をする中学生たち。この日のメニューはカレーライス。「こうした経験が、いざというとき自分の役割に気づき、行動できる力に結びつく」のだそうです。

また、キャンプでは「顔のわかる地域づくり」も目指します。参加した岩本良奈さん(南古谷小学校1年・並木)は、「初めて参加したけれど、すぐにお友達ができた」と話してくれました。父親の賀奈夫さん(43歳)は、「地域の大人と子どもが、イベントを通じてコミュニケーションすることで、近所の様子がわかる。近所の顔がわかると、いざというとき、助け合いが円滑にできます」とキャンプの効果を教えてくれました。イベントを通じて、顔のわかる地域の輪が広がります。



子どもたちの登下校を見守る活動、地域の緑を増やす運動、夜間の防犯パトロール、ごみゼロ運動……。人と人が支え合う地域をつくるには、市民の皆さんの協力が欠かせません。自治会をはじめとした、地域づくり活動に参加しませんか。



子どもたちの登下校

を見守る活動、地域の緑を

増やす運動、夜間の防犯パト

ロール、ごみゼロ運動……。人と人

とが支え合う地域をつくるには、

市民の皆さんの協力が欠かせませ

ん。自治会をはじめとした、

地域づくり活動に参加し

ませんか。

